

保健科学研究科保健科学専攻博士（後期）課程科目概要

科目名	概要	担当教員
保健科学特論特殊講義	<p>生命科学（ライフサイエンス／バイオサイエンス）は生物、人間、社会を考える総合的な学問体系です。21世紀は生命科学の時代と言われていますが、バイオテクノロジーやバイオニクス技術はさまざまな分野で多大な貢献をしてきました。保健科学総論特殊講義では、生命科学に関わる幅広い論文や参考文献を読み、生命科学の最新の情報と問題点について学びます。</p>	池脇 信直
	<p>保健科学は広範な領域を含む。ここでは保健科学のすべての領域の基礎となる生命科学領域、特に細胞生物学分野などのトピカルな論文を批判的に読み、議論を行う。つまり、それらの論文や引用文献を読んで内容を理解するだけでなく、それらの問題点や不十分な点を批判し、また学生それぞれの専門領域への展開を模索する。こうして、最先端の知識を得るだけでなく、研究の基本的な方法論を学ぶ。</p>	川野 純一
	<p>ヒトゲノム研究が進んで、ヒトゲノム構造がほぼ決定され、ポストゲノムの時代といわれます。しかし、基礎となり疾患遺伝子の同定の出発点は臨床遺伝学です。先天異常の一般発生頻度は100人に2～3人と少なく、しかも遺伝性疾患だけでもMcKusickのカタログによりますと約8,000種類と種類が多いのが特徴です。本講義では、先天異常のとらえかた、診断、治療などについて学びます。</p>	園田 徹
	<p>医療機器のヒューマンファクターエンジニアリング（HFE）の重要性、実現、評価について研究する。</p>	戸畑 裕志
	<p>保健科学総論として、まず日本人の健康状態を把握する。健康の指標として死亡率や有病率など用いられているが、少子高齢化、医療費の増大、医師不足など社会的問題についても考える能力を学ぶ。次に、予防医学のうち運動療法（運動処方）を中心に、英語論文から何が新しいか、問題点、矛盾点を理解できる能力を学ぶ。そのためには、日本語での知識も必要となります。 運動療法は、リハビリテーションの一つであり、医師の処方により保険適応となりますが、薬治療のような即効性は期待できません。しかし、副作用はなく、メタボリックシンドロームや生活習慣病といった代謝性疾患の治療・予防に有効であることは明らかとなっています。運動と循環・代謝について基礎的な機序を学習しながら、個体差（性？年齢？体力？）についても考える能力を身につけることを目標とします。</p>	樋口 博之
機能障害学特殊講義	<p>聴覚補償機器の一つである補聴器のリハビリテーションについて、研究の歴史と近年の動向、今後の展望について体系的に学ぶ。テキストでは、ハードウェア、ソフトウェアからカウンセリングまで、補聴器に関する基本的な概念が詳述されている。 まず、補聴器装用候補者の評価と補聴器の選定について最新の知見を学ぶ。次に、新規補聴器装用者へのカウンセリングを取り上げ、装用後の聴覚リハビリテーションにおけるコミュニケーション指導の重要性について検討する。さらに、補聴器の装用効果を評価する方法として、語音聴取能力の評価法と質問紙法による自己評価を取り上げ、それぞれの評価法の意義と課題について考察する。</p>	倉内 紀子
	<p>機能障害のなかで、精神遅滞をテーマにします。脳科学の分野における最近の発達はめざましいものがあります。脳の構造だけでなく機能面でも新しい知見が次々に明らかにされています。精神遅滞児の臨床においては、小児科医や小児精神科医のみではなく、教育、心理、福祉、保育、言語治療、看護、リハビリテーション、行政など多くの職種の方々のかかわりが必要です。本講義では精神遅滞児の診断、成因、養育の方法について最近の新しい脳科学の知見とを組み合わせることで学びます。</p>	園田 徹
機能矯正学特殊講義	<p>機能矯正学のうち、視能障害について、基本的概念、研究の動向、問題点の模索と解決法などについて学習する。具体的には特に、ICF国際生活機能分類について学習する。すなわち心身の機能回復重視から個人の目標に向けて患者自身のQOL創造をいかに行うかがリハビリテーションの最終目的となったことを理解した上で、研究論文作成のテーマの検討と、その実際を事例研究から学ぶ。</p>	内田 冴子
	<p>精神科病院および認知症患者を対象とした病院、施設における作業療法士は、「治療医学」、「環境衛生」、「疾病予防」にかかわるだけでなく、疾病を持つ人間の精神、心理的な問題や環境的問題の対処も求められることがある。そのためには、まず疾病などの要因で使用する機会が減少した「五感」などの感覚を、作業に興味・関心を持たせて積極性に使用する機会を設けることが必要となる。機能矯正を念頭に置く高度な作業療法の中では、クライアントに興味・関心を持たせて五感を刺激し積極性を引き出すことができる技法とはどのようなものがあり、効果を引き出すためにはさらにどのような創意工夫が必要なのかを常に念頭に置きながら実践活動を行う必要がある。 また、認知症も含めた精神科作業療法における「症状安定へ向けての援助」、「対人関係の改善」、「基本的な日常生活への援助」および「社会生活への援助」を行う場合、園芸など興味を持ちやすい作業療法技法を活用することで、患者自身が主体的な生活をめざし、より良い社会生活が営めるよう援助する方法を探る。</p>	小浦 誠吾
精神医学特殊講義	<p>精神科治療ということをもう一回基本的なものから考えなおしてほしい。（各、治療の方法、治療法の効果と限界、病態のとらえ方について）又、精神疾患とは、どのような問題を持ち、どのような対応が可能であるのかも、基礎に立ち戻って見なおす機会にしてほしい。又、精神科診断面接とは、どのようなことが、どのような効果があるのか、どのような技法なのか、又、その技法を獲得するにはどのようにすればよいのかなどについて研究し、学習できるようにしたい。</p>	矢花 芙美子

保健科学研究科保健科学専攻博士（後期）課程科目概要

科目名	概要	担当教員
機能形態学特殊講義	<p>全ての障害は神経に関係してくる。中枢神経や末梢神経の直接的な傷害に伴う疾患は言うまでもないが、効果器（筋）や感覚器における傷害はそこから中枢にいたる情報の歪を生じる。このことは最終的に統合野における情報処理の歪となって現れる。したがって、どのような分野においても必ず神経学的説明あるいは解釈がでなければならない。神経科学の内容は日進月歩で更新されており、常に最新の知見を理解できるだけの基礎を身につけておきたい。とりわけ、運動指令に関する神経系の構造については、基礎的な理解を深めておく必要がある。特別研究の内容によってはレポートの内容を変更することもあるが、基礎的な神経科学を身につけるための場として位置づけている。</p>	岩本 壮太郎
	<p>近年の幹細胞研究の飛躍的な進歩に伴い、幹細胞を用いた組織及び臓器再生の可能性が期待され、皮膚や骨などでは実用化されつつある。幹細胞を用いて失われた細胞を補う細胞補充は、体外から細胞を移植して持ち込む手法と、もともと臓器内に存在する内在性幹細胞を用いる手法とに区分される。本講義では構造の複雑さから他の臓器に比べて再生が困難と考えられている腎臓において、内在性幹細胞や移植幹細胞が腎臓の再生に関与しているのかについて学習する。</p>	近藤 照義
	<p>当講義では、感覚生理学を主に扱う。感覚神経系は、身体の内外部環境から得た情報を大脳皮質や皮質下の中枢に送り、適切で効果的な随意運動や本能行動の発現に寄与している。環境の変化を最初に検知するのは感覚器（受容器）であって、受容器は圧、光、音、匂いなどの物理・化学エネルギーを感覚線維内の電気信号（インパルス）に変換する役割をもっている。発生したインパルスは時間的、空間的パターンをもち、中枢神経系内のシナプスを經由するうち処理されて大脳皮質の特定の領野に達し、情報に特有な感覚を引き起こす。院生が研究しようとする分野と関係した感覚機能の情報処理を学習する。</p>	山下 由朗
臨床薬理学特殊講義	<p>運動系、聴覚系、視覚系の障害においては、いずれも神経系の異常が関係しており、これらに用いる薬物の知識は保健科学領域においても必要不可欠なものである。しかし、保健科学領域においては、薬物に関する教育の機会が非常に少ない。そこで臨床薬理学特殊講義では、保健科学領域での高度な職能教育の観点から、重要な神経系（末梢神経系を含む）疾患に用いる薬物について学習する。また、重篤な末梢神経系障害をもたらす主要な全身疾患についても学習する。</p>	山本 隆一
感染症学特殊講義	<p>感染症には「伝染する」という他の疾患にない特殊性がある。感染症の成立には、病原体と感受性の宿主、そしてその両者をつなぐ感染経路の三つの要因が必要である。従って、感染症に対する対策はこの三者が対象となる。すなわち、そのうちのいずれかを排除すれば感染症を予防し得る。本講義では、病原微生物の種類と特徴、それらが引き起こす主要な感染症、それらに対する有効な対策に関する基礎的な知識を習得し、目に見えない病原体を理性的目で見える習慣を身につけ、それを職場や日常生活の中で活用できるようになることを到達目標とする。</p>	南嶋 洋一
免疫学特殊講義	<p>自己免疫疾患とは、免疫機能の異常で免疫システムが自分の細胞や組織を誤認して攻撃してしまった結果出てくる症状を言います。自己免疫疾患には、関節リウマチ、多発性筋炎、多発性硬化症、重症筋無力症、全身性エリテマトーデス、橋本氏病、ベーチェット病、シェーグレン症候群、甲状腺機能亢進症、自己免疫性肝炎など数多くの病気があります。免疫学特殊講義では、（１）自己免疫疾患の特徴、（２）自己免疫疾患の遺伝的多型性、（３）自己免疫疾患の最新検査法、（４）自己免疫疾患の最新治療法、（５）自己免疫疾患の社会支援体制について考察を加えます。</p>	池脇 信直
機能障害学各論特殊講義	<p>&lt;ねらい&gt; リハビリテーションの対象となる機能障害を生活機能の視点からとらえ、その本質を探るとともに障害の科学的検証と論理的説明に関する思索能力を養う。 &lt;目 標&gt; ・生活障害の本質を探るための検証方法について学ぶ。 ・根拠に基づいた論理の展開方法を学ぶ。 &lt;方 法&gt; ・レポートは単に課題をこなすことより、教科書の関連部分や文献などを用いて自分の意見を述べるように心がける。 ・レポートには必ず和訳文を添付し、指定された箇所が適切に理解されたかどうかを確認する。 ・レポートは論文作成の基盤であることを念頭に入れ起承転結(序論～結論)に注意して作成する。 ・引用・参考文献は必ず巻末に記載するとともに文献リストを作成するように心がける。</p>	福本 安甫
	<p>慢性腎不全患者の原疾患比率は、糖尿病性腎症がトップである。透析導入時には四肢不自由、視覚障害を伴うことが多く、身体機能低下症例がほとんどといえる。また、これら患者は高齢化しており、身体的および精神的負担も多い。本特殊講義では糖尿病性腎症患者の重複機能障害およびその患者を取り巻く環境について調査、現状における問題点とその解決方法について学ぶ。</p>	竹澤 真吾
	<p>受講者が研究しようとする分野における身体的機能障害について、その性格を特徴付ける要因（例えば、頻度、障害の種類や程度など）を具体的に検討し、日常生活における障害の発生あるいはその増悪の予防に有用な対応策の立案と実践について学習します。なお、担当教員の経歴からみた専門分野にこだわる必要はありません。本講義のレポート課題は対象となる障害の検討からはじまります。具体的には受講生は各自が意図する研究（あるいは研究対象あるいは研究方法など）を念頭におき、研究の意義と、レポート作成の方向を取り上げ、第1回課題のレポートとすることが求められます。その後は、その予定にしたがって第2から第5回のレポートを仕上げてください。ただし、その途中で第1回レポートで示したもののからの変更は自由ですが、その理由と変更したことの有利性を充分述べることが求められます。したがって、第1回のレポートは1年間の学習過程を想定し、よく検討してから作成する必要があります。また、第4回レポート提出時には、レポートとは別に、それまでに参考にした英文論文で最も適当なものを選び、その中の約3,000語の英文について、原文（コピー）および日本語訳を提出してください。</p>	澤田 惇

保健科学研究科保健科学専攻博士（後期）課程科目概要

科目名	概要	担当教員
機能矯正学各論特殊講義	<p>本講は機能矯正学のうち特に視能障害リハビリテーション（視能矯正学）についてのものである。即ち、①視覚の質と量を増強するリハビリテーション、②残存機能およびビジュアルエイドの使用を主とするリハビリテーションに大別し学習する。また、①では視覚を入力・統合・出力障害の観点から視能矯正学の内外の文献を提示しながら学習することにより、「特殊研究」遂行のための論理性・思考過程・問題解決能力の構築に役立て、研究者育成の基盤とする。</p>	内田 冴子
	<p>&lt;ねらい&gt; リハビリテーション治療法の妥当性を検証する方法について学び、その過程を通じて研究者として必要な態度を養う。 &lt;目 標&gt; ・EBM (evidence based medicine) に基づく効果検証の方法と意義を習得する。 ・与えられた課題について、論拠を持った論理の展開が出来るようにする。 &lt;方 法&gt; ・レポートは単に課題をこなすことより、教科書の関連部分や文献などを用いて自分の意見を述べるように心がける。 ・レポートには必ず和訳文を添付し、指定された箇所が適切に理解されたかどうかを確認する。 ・レポートは論文作成の基盤であることを念頭に入れ起承転結(序論～結論)に注意して作成する。 ・引用・参考文献は必ず巻末に記載するとともに文献リストを作成するように心がける。</p>	福本 安甫
	<p>主要臓器（循環器、呼吸器、代謝内分泌関連臓器）の障害をここでは取り扱う。 各種臓器機能は低下していくが、その過程が、急性、亜急性そして、多くは慢性といった経過をたどる。その中で、代償的機転が作用して維持していくこともある。その変化は徐々に認められることも多く、次の検査、診断評価、次の治療を必要とするのかを考えることが、個人、家族、社会、医療経済を含め重要となってくる。 また、人工臓器、臓器移植といった治療が、諸外国と比較して現状と将来的にどうあるべきかを個人、家族、社会、医療経済にあたるインパクトさらに、倫理的配慮について総合的に判断していく課程を学習する。 英文論文の抄読を行い、内容について吟味検討を行う。</p>	吉武 重徳

保健科学研究科保健科学専攻博士（後期）課程科目概要

科目名	概要	担当教員
保健科学特殊研究	<p>研究競争がグローバル化した今、予想しなかった技術情報が突然海外から飛び込んでくることは珍しくありません。研究開発にとっての革新技術に関わる情報収集や知的財産が今まで以上に重要になってくると考えられます。大学の近未来技術と知的財産はどのように変貌していくのか、産学連携における研究成果の有効活用について考えていきます。</p>	池脇 信直
	<p>運動の解析に関する研究はこれまでも多数行われているが、その神経学的な考察まで踏み込んだものは少ない。これまでのData収集に依存する研究方法を進展させ、障害を含む様々な行動を解析すると同時に、その神経学的な背景を探ることに重点を置く。研究内容によって、テキスト、レポートの内容は変更がある。</p>	岩本 壮太郎
	<p>3年間の履修の最終目的である研究論文作成にむけての学習である。即ち研究テーマ（課題）の決定と研究計画の作成を目標に、先ず先行研究の調査とまとめを行い、自らの研究テーマの独自性を思考・発見することを指導する。次に、最終研究にむけてまずパイロット研究を行いその過程で研究計画の立て方、研究の方法論、まとめ方の具体的学習を行いながら論文の最終計画書を作成し、本論文に着手できるようにする。3年間の年次計画については、1年次は第1回～第3回論文計画レポートにて提出した内容の実証を行う。2年次はパイロット研究の結果に基づき論文課題の研究を実施する。3年次では前期に論文内容の記述を完成し、後期には論文発表雑誌に投稿する形式をととのえ修了に備える。</p>	内田 冴子
	<p>ここでは各院生の専門領域で、特に組織学や解剖学に関連した研究を行い、その成果を論文にまとめる。1年次では、研究課題を絞り込み、具体的な研究計画を作り上げる。一つはデータを出すのに短期間ですむものと、長期間が必要なものと二種類の研究計画を立てることを目標とする。2年次では、それらをもとに研究をすすめ、前者の研究を論文にまとめることを目標とする。3年次では、後者の研究成果を論文にする。</p>	川野 純一
	<p>小児および成人期の聴覚障害の臨床に資する、検査・評価、診断、治療、訓練、指導等に関するテーマを設定し、実践的研究を行う。研究に必要な手続き、手法を体得しながら論文作成に至る。研究の展開は概ね以下のとおりである。</p> <p>1年次 ①研究テーマの設定 ②研究計画の作成 ③予備研究の実施</p> <p>2年次 ④研究計画の修正 ⑤本研究の実施 ⑥研究経過の報告</p> <p>3年次 ⑦初稿論文の提出 ⑧最終論文の提出 ⑨プレゼンテーション資料の提出</p>	倉内 紀子
	<p>ここでは、認知症の作業療法に的を絞り、五感を刺激し、知覚・認知機能、感覚統合機能を賦活する作業療法技法としての園芸療法の実践をエビデンスとして確立するために、作業内容や自助具の工夫などの実践の技術向上に加えて以下のことを実践により創意工夫する。</p> <p>①従来の評価表を元に、施設・病院に即した独自の評価方法を探る。 ②評価資料として、客観的にしかも安全でクライアントの負担がない淡路式園芸療法評価表、フェーススケール、モラルスケール、生活健康スケールおよび簡便型唾液検査によるストレス診断の活用を検討する。 ③臨床実践を行い、他の評価表と独自の評価表の相関を調査する。 ④園芸療法と他の療法の組合せにより、認知症患者に対する作業療法の精度を高め、園芸療法と他の療法との組み合わせに伴う相性について検討する。 ⑤その他、施設・病院独自に必要とされる作業療法技法の確立を目指す。</p> <p>以上の項目を実践し、医療・保健現場で望まれる活動を行いながら、園芸療法を作業療法技法として確立するためのエビデンスとなるデータを収集するための研究を行う。</p>	小浦 誠吾
	<p>研究の大まかな課題は、「炎症における侵害刺激受容ニューロン（痛みを伝える知覚神経）の役割」、「脊髄損傷における内在性神経幹細胞の役割」などを考えているが、具体的には職場で何がどこまでできるかを考慮して決める。</p>	近藤 照義
	<p>血液浄化に関する研究を行い、博士論文として完成させることを目的とする。研究テーマは各自の環境を考慮して決定する。</p> <p>1年次：おもに文献調査を中心とし、研究のバックグラウンド、位置付けを明確にする。 2年次：実験等によるデータ採取を行い、研究の方針を定めるとともに新しい知見について考察する。 3年次：得られた結果をもとに論文を作成、学会誌にて発表する。</p> <p>基本的に研究成果は国際誌へ投稿し、学術的評価を受ける。 研究内容については頻りにメールで情報交換を行い、論文の完成を目指す。 本研究では血液浄化領域における高度な研究方法を身につけ、学位取得後は本領域での学術研究の中心的役割が果たせるよう指導する。国際的評価に耐えられる研究が行えるかどうかポイントであり、国際学会での発表、論文投稿は必須である。</p>	竹澤 真吾
	<p>医療治療機器（電磁エネルギーを中心とした治療機器）、生体計測、生体機能代行装置（人工呼吸器関連）における、性能、効率、安全性、およびこれの装置を医療現場で使用する際に発生する電磁環境問題、ヒューマンエラーに関する研究を行う。</p>	戸畑 裕志
<p>医学（未熟児・新生児医療）の進歩にともない、周産期の異常や感染症をはじめとする種々の疾患でなくなる子どもたちの頻度は減少してきました。染色体異常、奇形症候群、精神遅滞をともなう小児の発生頻度は相対的に増加しています。これらの子どもたちの長期にわたる包括医療（医療的課題と療育的課題）が重要です。脳科学の分野における最近の発達めざましいものがあります。脳の構造だけではなく機能面でもあたらしい知見が次々に明らかにされています。染色体異常、奇形症候群、精神遅滞児の臨床においては、小児科医や小児精神科医のみではなく、教育、心理、福祉、保育、言語治療、看護、リハビリテーション、行政などおおくの職種の方々のかわりが必要で、少子化や核家族化の影響で、各地で育児支援事業が始まり、育児支援施設が作られています。障害を持つ子どもたちについての支援は未だ十分とはいえません。小児の染色体異常、奇形症候群、精神遅滞の診断、成因、養育、訓練、教育などに関して研究テーマを自由に設定できます。</p>	園田 徹	

保健科学研究科保健科学専攻博士（後期）課程科目概要

科目名	概要	担当教員
保健科学特殊研究	<p>保健科学特殊研究は博士論文の完成に至るすべての過程を含み、研究者として必要な研究態度の育成を目的とする。3年間の講義目標と計画は次の通りである。</p> <p>&lt;1年次&gt;                      ・目標：適正な研究テーマを設定できるようにする。                      ・方法：研究テーマに関連する先行研究のレビューから課題をピックアップする。研究課題を絞り込み解決方法を検討する（研究仮説の設定）。</p> <p>&lt;2年次&gt;                      ・目標：研究方法の妥当性と適正化を検証する。                      ・方法：仮説立証のための研究方法を検討するためのパイロットスタディを行う。適正な研究方法を確認してデータ収集および解析を行う。</p> <p>&lt;3年次&gt;                      ・目標：博士論文を作成する。                      ・方法：データ解析に基づいた論理の展開を試みる。博士論文を作成する。</p>	福本 安甫
	<p>感染症は古来人類の最大の脅威であったが、化学療法をはじめとする医学の進歩は、近年感染症軽視の風潮を生んだ。しかし、病原微生物の逆襲に遇い、感染症の話題が後を絶たない現状である。多くの病原微生物に対して、もはや無菌志向に代表される排除の論理は通用しない。それに代わる共生の発想が必要である。事実、特にウイルスは、ウイルス自身の存続のために、宿主の存続が不可欠であり、感染症はその一側面に過ぎない。ウイルス感染症はウイルスの存続機構を通して理解する必要がある。本講義では、上記のような生態学的観点に立って、「世界の感染症の発生状況とその要因解析」を到達目標とする。時時刻刻変貌する感染症に関する正確な知識とそれを把握する技術の習得を通して、論文作成への道を拓きたい。併せて人類の歴史における感染症の意義を取り上げ、感染症の過去・現在・未来に関する的確な視点と理解が得られるようにしたい。</p>	南嶋 洋一
	<p>本講では、保健学領域における、保健学研究を行ううえで、必要な専門知識を学び、さらに研究計画を立案し、実行できる能力を育成することを目標とする。</p>	矢花 芙美子
	<p>ここでは各院生の専門領域で、特に感覚・神経生理学に関連した研究を行い、その成果を論文にまとめる。1年前半では、研究課題を絞り込み、具体的な研究計画を作り上げる。1年次後半より、それらをもとに研究をすすめる。3年次では、データをまとめ、論文にする。</p>	山下 由朗
	<p>研究を行うのに必要な手続きや手法について、院生に指導し、院生の研究の成果を論文としてまとめる。具体的には、博士論文作成のための先行研究について指導を行い、学生の思索能力を高める。文献の講読を行いながら、仮説を立案し、リサーチを行う院生は調査の計画を、文献研究を考えている院生はその構想を立案させ、その研究の進捗状況に沿って集中的に必要な指導と援助を行う。</p>	山本 隆一
	<p>医学の一端を担う臨床工学技師として、実践のみでなく、科学的な視点から医療にアプローチしていく過程を学ぶ。情報収集には、研究がどのように行われ、何を導き出されているのかを、把握する上で、客観的に、正当な批判能力を養う。その過程で日本語論文のみでなく、英語論文の読解力を必要とし、これを吟味して、患者群に適切に当てはまるのかを検討する能力をマスターする。特殊研究は、博士論文の完成に至るまでのすべての過程であり、医療実践者であると共に、研究者（科学者）としての身につけるべき、研究への真摯な態度を養っていく。院生が職場や臨床的環境において、実験的、臨床的研究をとりあげ、臨床工学的にアプローチした研究成果が得られるように指導する。具体的な研究計画として、主題に沿った短期的、長期的の2種類の研究を作成して執筆・作成を行う。</p>	吉武 重徳
	<p>保健科学領域のうち、予防医学、特に運動療法に関する分野について研究指導を行います。実験系（応用生理学）、フィールド・スタディ（運動疫学、運動器リハビリテーション）、どちらの研究デザインもオリジナリティのある保健科学領域で役立つ内容とします。博士課程を修了する基準の一つとして、査読のある学術雑誌に1編以上の研究論文を公表することがあります。また、本学のスクーリング時に中間発表を設定していますが、中間発表だけでは専門分野の質問や意見を十分に得ることはできないと思われるため、学術集会（研究会でも可）での発表も要求します。最終的に、国内だけでなく、国際的な視野で研究が行えるレベルに到達させるために、研究指導を行います。英語論文の抄読から、英語要約（abstract）の作成までを最低限の学習内容とします。既に、国際学会等で研究発表の経験がある方には、英語論文の作成を目標に研究指導を行います。</p>	樋口 博之